

大切なのは楽曲、作品の原点から創造すること

今年で第15回目を迎えた「新日鉄音楽賞」。今年はフレッシュアーティスト賞をヴァイオリニストの植村理葉さん、特別賞は演出家の栗山昌良氏が受賞した。本企画では受賞者のお二人をお招きし、(財)新日鉄文化財団の千速晃理事長と、受賞の感想や活動への思い、企業メセナなどについて語り合っていた。



ゲスト /

ヴァイオリニスト **植村 理葉さん**



演出家

栗山 昌良氏



新日本製鉄(株)代表取締役会長

(財)新日鉄文化財団理事長 **千速 晃**

千速 新日鉄音楽賞受賞おめでとうございます。

植村 ありがとうございます。思いがけず受賞のお知らせを聞き、初めは大変驚きました。立派な選考委員の方々を選んでいただいて光栄です。今後もさらに責任感を持って、心を新たに活動していきたいと思えます。

栗山 新日鉄音楽賞は、第1回の松本美和子さんの時からほぼ毎年贈呈式に出席させていただいています。今までの受賞者の方々を良く存じ上げていますが、まさか僕が受賞するとは夢にも思っていませんでした。ありがとうございました。

千速 植村さんはベルリン在住でヨーロッパでの公演が多いとお聞きしていますが、現在の活動内容はどのようなものですか。

植村 ソリストとしてオーケストラと共演する活動が中心です。現在はドイツでの公演が圧倒的に多く、年間15~17回になります。昨年は5都市でメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲を演奏しました。日本では過去に、毎日ソリステンや名古屋フィルハーモニー交響楽団の定期演奏会などに出演しました。昨年4月からは東京・立川で、ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ全曲演奏会(10曲、全4回)を始め、今年3月に第4回公演があります。今後、日本での活動も増やしていきたいと考えています。

千速 栗山さんは、半世紀にわたるご活動の中で膨大な数の作品を手がけていらっしゃると思います。近年のご活動はどのようなものですか。

栗山 僕の活動の最盛期は1970~80年代でした。演出は、演じられた瞬間に消えていく仕事ですから、“時代性”とも言うべき、その時代の社会のあり方に影響を受けます。僕の活動が時代に合うかどうかを考えていたときにこの賞をいただきましたので、ここまで見ていてくださるのなら、もう少し素直な気持ちで、今後もお誘いがあれば仕事をしようと思っています。

楽譜に嘘をつかない“誠実さ”が基本

千速 植村さんは授賞理由の中で、「ヴァイオリニストと呼ぶよりも、むしろ“音楽家”と呼ぶ方がふさわしい」と評価されていますが、演奏で心がけていることは何ですか。また、ドイツで活動されていて日本の音楽事情との違いを感じますか。

植村 音楽を解釈するには、楽曲が作られた当時まで遡って、何を意味していたかということを読み取ることが大切です。楽譜を読んで作曲家の背景を考え楽曲の原点に戻り、演奏する自分と照らし合わせて、完全に自分と一体化した時点で演奏することを心がけています。その表現がお客様に伝わって、一人ひとりの心で何かを感じ取っていただければうれしく思います。音楽事情の違いについては、国の援助が少ない日本では、演奏家もどれだけ集客できるかといった演奏以外のことで気を使う場面が多いように思います。またドイツでは、演奏家の知名度にかかわらず、皆さん生活の一部として気楽に音楽会へ行きます。

千速 栗山さんは、現在、奇をてらう現代的オペラ演出が花盛りの中で、1954年のデビュー以来、一貫して原作の持つ音楽性やドラマ性を大切にされ、正攻法とも言うべき舞台を作られてきましたね。

栗山 オペラは一言で言うと、“楽譜をいかに読み、それをどのように視覚化するか”です。さまざまな要素があり、その一つが欠けても成立しません。植村さんのお話にもありましたが、原点である楽譜を勝手に解釈しないということが基本ですね。オペラは一つの公演で、最低でも約200人のスタッフが動きます。表現に対する意識を共有化するためには、きちんと思いを伝えなければなりません。大切なことは“誠実さ”の一語に尽きます。“楽譜に嘘をつかない、ごまかさない”、つまり作品に対して誠実であることが重要です。



植村 理葉さん

プロフィール/うえむら・りよ

1971年生まれ。桐朋女子高校卒。全日本学生音楽コンクール小学校の部全国1位。日本音楽コンクール第2位。文化庁芸術家在外研修員(3年派遣)、ローマ奨学金を受ける。ケルン音楽大学、ローザンヌ音楽院、ドレスデン音楽大学で研鑽。ミケランジェロ・アバド国際コンクール優勝。モーツァルト国際コンクール2位(最高位)モーツァルト特別賞受賞。ミュンヘン放送交響楽団、アウグスブルク・フィルなどドイツ各地のオーケストラと共演。滞欧15年、協奏曲のソリストとして成功を収める。国内では毎日ソリストに出演。東響、東京フィルなどと共演。今年にはストラヴィンスキーのヴァイオリン協奏曲をチューリッゲン・フィルと共演。国内では川口で新たにベートーヴェン・ソナタ全曲演奏会の2巡目を予定。シューマンのヴァイオリン協奏曲のCDをドイツ・ソニーからリリース。



1981年、鈴木共子教室バイオリン発表会にて。翌年学生音楽コンクール 小学校の部全国第1位



ドイツ・ケルン音楽大学留学の頃。ケルン市街を流れるライン川の川岸で祖父と



栗山 昌良氏

プロフィール/くりやま・まさよし

1926年生まれ。東京出身。劇団俳優座を経て、1954年、二期会オペラ「アマールと夜の訪問者」(メノッティ)でオペラ演出家としてデビュー。1969年、畑中良輔、若杉弘と東京室内歌劇場を結成。以来、代表的な名作オペラ、特に日本のオペラを数多く手がける。1972年文化庁在外研修員として留学。文化庁オペラ研修所所長、新国立劇場オペラ研修所講師などを歴任。昨年度は「椿姫」「蝶々夫人」「卒塔婆小町」(石桁眞礼生)「ヴォツェック」(ベルク)などの演出。2005年は「こうもり」「声」(ブーランク)「トゥーランドット」「コシ・ファン・トゥッテ」などを手がける。国立音楽大学名誉教授。これまでに1987年紫綬褒章、1996年勲四等旭日小綬章受章。



1987年、二期会オペラ カルメン 稽古場にて



2003年9月、二期会オペラ 蝶々夫人 写真提供:二期会オペラ振興会

企業の幅広く息の長い支援に期待

千速 当社では1995年、“発掘・創造・育成・交流の場”をテーマに「紀尾井ホール」をオープンし、その運営母体として「(財)新日鉄文化財団」を設立しました。洋楽ホール(800席)は室内楽ホールという位置付けが、邦楽ホール(250席)は日本初の邦楽専用ホールとして高く評価されています。交通の便が良く、緑豊かな場所を建設地に選んで良かったと思っています。

植村 企業が芸術を支援なさることは素晴らしいと思います。以前から、紀尾井ホールで一度演奏してみたいと思っていたので、今年7月の受賞記念コンサートで弾けることが今から楽しみです。また、「紀尾井シンフォニエッタ東京」は素晴らしいオーケストラですから、いつかメンデルスゾーンやベートーヴェンの協奏曲で共演させていただく機会ができれば幸せです。

栗山 それは楽しみです。紀尾井ホールは稼働率も非常に高く、邦楽ホールもあわせて本当にいいホールです。現在、オペラは盛んだと言われますが、以前、観賞団体の活動が盛んだった時代は上演回数が今よりはるかに多かったように思います。今の歌手さんは技術的にレベルアップしましたが、その力を発揮する場が少なくなっていますので、これからはもっと積極的支援があればと思っています。

千速 何かお役に立てる機会があればうれしく思います。最後に、今後のお仕事にける思いや抱負をお聞かせください。



植村 ヴァイオリンは私の生活の一部です。いや、それが全てかもしれません。人間的にさまざまな経験をして成長できる糧でもあります。やりがいのあることを自然な形で見つけられたことを幸せに思っています。約10年前に、共演していたオーケストラから依頼され、シューマンのヴァイオリン協奏曲のCDをリリースしました。最近2枚目についての問い合わせがあったときに「ありません」とお答えするのが申し訳なく、そろそろ制作したいと思っています。現在はCDで聴かれる方も大勢いらっしゃいますので、活動の一環として是非実現させたいですね。

栗山 結果的にオペラは僕の一生です。20世紀の初めの頃、オペラは過去の芸術である、と言われていましたが、再び蘇った。そんな時代を走ってきた“20世紀人間”です。ですから未来と言っても...(笑) 現在お引き受けしている仕事を無事に終えるだけです。

千速 本日はありがとうございました。